

博士 (2020 年度)

作田啓一の「文学社会学」的实践についての研究 ——落伍者とユートピア——

佐藤 裕亮

1. 本論文の構成

本論文は、「はじめに」と「おわりにかえて」を除く6章で構成されている。

「はじめに」では、『現実界の探偵』（作田 2012）と『価値の社会学』（作田 1972）を続けて読み、作田啓一（1922~2016）に対して著者が抱いた「この人物は何者なのだろうか」という最初の違和感に触れながら、「作田はなぜ文学を参照し続けたのか」という本論文の問いが提示されるとともに、本論文の視点が「文学／社会学」という用語で示される。「1. 「日本社会」という謎——〈アノミーと欲望の問題系〉と、〈罪と赦しの問題系〉」では、作田の初期（1950年代から1970年頃）の仕事を、エッセイや学術論文、書評などの区別なく参照・検討することで、作田の生涯を貫く〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉という二つの問題系の生成過程を論じている。「2. ユートピアとしての〈過去〉——ルソーにおける「楽園喪失」のヴィジョン」では、しばしば作田の思想的な転換点と指摘されてきた『ジャン・ジャック・ルソー』（作田 1980）が〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉の延長上にあることを示すとともに、作田がルソーの文学的想像力から得た可能性と、ルソーから離脱していく契機が論じられている。「3. 「種子を蒔く人」——ユートピアとしての〈未来〉」では、作田の中期の「文学社会学」の代表作である『ドストエフスキーの世界』（作田 1988）の読解を通じて、作田が〈アノミーと欲望の問題系〉と〈罪と赦しの問題系〉に対する解として「種子を蒔く人」という人物形象を考案したことが論じられる。「4. 「楽園喪失」の再検討——ラカン理論によるデュルケム」では、作田が「フランス現代思想」と総称される理論群から E・デュルケムの『自殺論』に対して行った批判的検討を通じて、『ドストエフスキーの世界』以後に作田が自身の問いを練り上げていくさまを再構成している。「5. 瞬間・隙間・偶然性——〈他者〉の現れる時 - 空間」では、作田の後期の「文学社会学」である『生の欲動』（作田 2003）と『現実界の探偵』の検討から、作田が「文学」を通して描き出そうとした〈現実〉の相貌を論じる。「6. 「死（にゆく）者」の無辜と救済——作田啓一の晩年の思想」では、作田の最晩年の断片的なノート群を整理しながら、作田の思想的到達点を「死にゆく者の立場」という言葉で示す。「おわりにかえて——儚い希望の社会学」では、作田が「文学」を参照し続けた理由を、「儚い希望」という言葉で論じている。

2. 本論文の内容

初期作田社会学の対象は「日本社会」である。作田は E・デュルケムと R・K・マーソンの「アノミー」論の検討を通じて、戦後日本社会が「成層化のシステム」という、人びとの社会的欲望を駆り立てる社会であることを発見する。それと同時に、作田は旧日本軍による戦争犯罪を研究する過程で、戦前の日本社会が異質な他者を排除する「集合暴力」によって連帯を維持する「閉じた社会」（H・ベルクソン）であることを発見する。戦前戦後

の「日本社会」に二つの社会病理は、作田の仕事の方向性を変更する。すなわち、作田は「文学」に描かれる社会や集団の「落伍者」に着目することにより、「閉じた社会」の暴力性と、人びとを社会的成功へと駆り立てる社会統合のメカニズム（「成層化のシステム」）を批判する方向に舵を切ることになる（1章）。

作田が次に依拠する「落伍者」は、18世紀の思想家J・J・ルソーである。ルソーは人間が他者との比較や自尊心の苦悩を知る以前の「自然状態」という幸福な状況を仮構することによって、同時代の市民社会を痛烈に批判した。裏返せば、ルソーの考えでは、人間は相互に比較することで幸福から遠ざかったのだ。ただし、作田のルソーへの関心は、人間の欲望の発生についての社会心理学的洞察だけにとどまらない。作田はN・O・ブラウンの文明論に示唆を受けながら、ルソーを〈おとな〉への発達を逆行（「退行」）する人物として描き出すと同時に、〈おとな〉たちの社会＝「文明社会」に対する批判的な視座をもつ社会思想家として描く。作田によれば、ルソーは同時代の“市民社会”の悪＝「罪」を推し測るための物差しとして、個々の財産を「全体社会」に返還して平等を獲得する共産制（作田の用語では〈スパルタ〉ユートピア）と、排他的な恋愛を廃棄した閉鎖的な社会集団（〈クララン〉ユートピア）という二つの「ユートピア」を描いた。さらに、晩年に「孤独な散歩者」となったルソーは自然に対する「溶解体験」を記述した。外界のリズムと浸透する「溶解体験」において、人は自己や自己の拡大である集団を〈防衛〉するための境界を喪失する。「溶解体験」は作田にとって、「閉じた社会」を批判するための生涯の足場となった。しかし作田はルソーに疑念を抱く。ルソーが「溶け込む」のは自然だけであって、実際に同時代の社会の中に回帰しないだけでなく、自分の考えたモデルが同時代の社会の中に生きた場合、何が起きるのかを思考実験しなかった。ルソーは市民社会を批判するために〈過去〉に「退行」した。そのときルソーは自らの欲望を妨げるあらゆる他者から逃れ、〈幼児〉として「直接性」の幸福を生きる。だが、〈幼児〉の立場を棄てて社会にかかわり、「楽園」をめざし、傷つき、生きる道もありうるはずだ。作田がルソーに見切りをつけるのは、ルソーにとっての幸福が〈幼児期〉にとどまったからである。以上のような問題関心のもとで作田はドストエフスキーの読解に進む（2章）。

作田はドストエフスキーの作品を、主にR・ジラルの理論に基づいた暴力論の文脈から読解した。すなわち、まとまりの取れていない、ある集団があったとする。その成員間では「模倣欲望」に由来する相互暴力・相互憎悪が蔓延しており、集団として危機的状況にある。ある日、その集団に〈異郷人〉が現れる。すると集団の成員は〈異郷人〉をその集団のための「いけにえ」に仕立て上げ、彼または彼女に対して共同暴力を行使することによって、集団としての連帯を獲得する。つまり、集合暴力は相互暴力を共同暴力に転化することによって生じているのだ。それでは、暴力の犠牲者である「いけにえ」と、暴力の主体である成員を「暴力＝罪」から救済するためにはどうすればよいか。作田は「種子を蒔く人」という人物形象を考案することで、その解を出した。作田はドストエフスキー最後の長編『カラマーゾフの兄弟』の主人公アリョーシャのように、共同体ないし集団の外部から来た〈異郷人〉として、集団の他の成員（主に〈子どもたち〉）を、現存する社会秩序からの「離脱」に導く〈父〉になることが、共同暴力から「いけにえ」と成員を救う道になると考えた。「種子を蒔く人」＝〈父〉は〈子どもたち〉という〈未来〉に「希望」を託すことによって、現在の不幸や哀しみが〈未来〉になくなることを祈願する。一方、

〈子どもたち〉は、〈父〉が提示する「暴力＝罪」から救済された社会のヴィジョンを共有する。このように、「種子を蒔く人」という人物形象を構築することによって、作田は初期からの問いである人間の欲望の問題と罪の問題に対する一つの解を出す（3章）。

しかし作田の探求は『ドストエフスキーの世界』以後も続く。これまで作田は暴力の動機を考える際、つねに集団や共同体といった「個人」を超越した存在＝「社会」を想定してきた。集合暴力からの救済には、暴力によって構成された「いま、ここ」にある「社会」からある程度「離脱」していることが重要になった理由もこの点にある。なぜなら、〈異郷人〉や〈子どもたち〉など、現存する「社会」から「離脱」している人物形象は、その社会的あり方（「非・所属性」）において、暴力によって維持・形成される「社会」の有罪性を告発しうるからである。しかし、暴力や悪はすべて「社会」という視点によって説明できるのだろうか。「人間」の内部にある「何か」こそ、暴力をもたらす本当の動機なのではないか。『ドストエフスキーの世界』以後、作田は方法論の検討に移る。作田は1998年の同人誌『Becoming』創刊後、精神分析家J・ラカンの理論など、「現代思想」の知見を多く取り入れることになる。初期に、作田は近代社会の「成層化のシステム」という報酬配分のメカニズムを問題化していた。「成層化のシステム」においては上位の地位の人ほど報酬が多いので、人びとは絶えず社会的地位の上昇をめざす。作田はラカン理論に基づいて「成層化のシステム」を内面化して生きる人びとの苦悩に光を当てる。「成層化のシステム」に順応して、身近な他者との「差異化の欲望」に取り憑かれた人びとを作田は「倒錯者」と呼ぶ。「倒錯者」はその内部に「空虚感」を抱えているがゆえに、何物にも満たされることがない。作田はラカン理論に依拠して、「差異化の欲望」から解放されるためには、合理性に基づいて成立する社会秩序と、習慣化・秩序化された安定的な日常生活（作田の用語では〈世界〉ないし「象徴的世界」）から漏れ落ちる「リアルなもの＝現実界」への感受性を高めることの必要性を発見する。なお、それと同時に、社会学理論の多くが理解可能で身近な他者との関係を中心にするあまり、「差異化の欲望」に対する批判的思考を育むことができないのではないかと、社会学理論に対する批判を展開した（4章）。

晩年の作田の仕事は「文学」に示唆を受けた「現実界の探求」として総括できるが、その方向性には大きく分けて二つある。作田によれば、「現実界」に遭遇すると、人は身近な他者との「差異化の欲望」を超えた、強烈なリアリティに直面する。作田は「現実界」の人格化された形象として、E・レヴィナスの言う〈他者〉を想定する。〈他者〉は、「象徴的世界」におけるあらゆる社会的価値を剥奪された悲惨さと脆弱さ、そして「無辜（innocence）」によって特徴づけられる。〈他者〉との遭遇は安定した日常生活の「隙間」（時間としては「瞬間」）に、不意に起きる。作田は、劇作家の別役実の犯罪論などに示唆を受けながら、安定した「象徴的世界」（日常の生活）の「隙間」に現れる「現実界＝リアルなもの」に関心を抱く作家を「現実界の探偵」と呼ぶとともに、自身の思索の足場を、再び「文学」に見出すことになる。本論文では、作田の言う「現実界＝リアルなもの」について、作田によるS・ジジエクへの批判的言及や「隙間」の概念、文学の読解を参照しつつ、哲学者の九鬼周造の議論を補助線に、「非人間」的で「偶然」的な、「起こってはならないことが起こる」（現実）の相貌として解釈した（5章）。

もう一つの方向性は、日本近代文学の作家たちの仕事と、ロシアの劇作家チェーホフに依拠したものである（作田 2013, 2016ab）。作田の考えでは、日本近代文学の作家たちは自

分自身の社会的立場を放棄したり、「放心状態」に陥ったりすることによって、人生の真実や生命の輝きを描き出すことを得意とした。本論文では、齢 90 を迎えた作田が断片的に残したノート群を縦横に狩猟しながら、作田が最晩年に見た「希望」についての再構成を試みた。作田は社会的な落伍者や病者、老いた人を「死者（死にゆく者）」と呼ぶ。作田の考えでは、「死者」は自分自身を遠い未来に置いて〈いま、ここ〉をある種の「懐かしさ」とともに眺めることで、〈いま、ここ〉で生きることの儚さと輝きを見る。本論文では、年老いて「呆けた」親の生活を描写する佐野洋子（[2008] 2010）や岡野雄一（2012] 2019）のエッセイを参照しながら、作田が最晩年に「死者の立場」という概念に仮託した「希望」とは、生と死の境界が曖昧になる人がもつ、儚い人間の生に対する愛おしさなのではないかと論じた（6 章）。

「社会学者」である作田は、「アノミー」や「欲望」、「集合暴力」などのように、人間が社会を生きるなかで生じる様々な苦悩や問題を発見し、分析する。作田は人間の社会生活における苦悩や問題を扱う際に「社会学」を活用する。作田にとって「社会学」は、人間が日常生活を送るなかで苦悩や生きづらさを抱える舞台ないし、その舞台を構成する「力（puissance）」の担い手としての「社会」を発見する道具であり、その「力」を分析するための知的資源なのである。これに対して、「文学」は人間の内部にある〈力（force）〉を描く。作田が依拠した「文学」に描かれるのはどれも悲惨な生（「落伍者 underdog」）ばかりである。彼・彼女らは自身の内部にある〈力〉に振り回され、「社会」にも打ち負かされ、捨て犬（underdog）のように命を落とすこともある。また、何かのきっかけさえあれば、私たちは誰も「落伍者」になりうる。しかし、「落伍者」の〈力〉が照らし出す「希望」を描くことができるのもまた、「文学」なのである（その意味で人間の〈力〉は resilience でもある）。作田はその「希望」のきらめきに魅了され、「溶解体験」や「種子を蒔く人」、「逆立ちした希望」といった概念を考案し続けた。希望は社会の「力」ではなく、人間の〈力〉に宿る。人間の〈力〉に目を向けるとき、私たちは、作田の〈社会学〉を受け継ぐ最初の一步を踏み出している（「おわりにかえて」）。

参考文献

- 岡野雄一, [2012] 2019, 『ペコロスの母に会いに行く』角川書店。
作田啓一, 1972, 『価値の社会学』岩波書店。
———, 1980, 『ジャン＝ジャック・ルソー——市民と個人』人文書院。
———, 1988, 『ドストエフスキーの世界』筑摩書房。
———, 2003, 『生の欲動——神経症から倒錯へ』みすず書房。
———, 2012, 『現実界の探偵——文学と犯罪』白水社。
———, 2013, 「チェーホフ——絶望と希望の文学」『Becoming』32: 3-58。
———, 2016a, 「日本近代文学に見られる自我の放棄——伊藤整の枠組に従って」亀山佳明編『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社, 197-228。
———, 2016b, 「日本近代文学に見られる自我の放棄（続）——リアルの現れる場所」亀山佳明編『記憶とリアルのゆくえ——文学社会学の試み』新曜社, 229-63。
佐野洋子, [2008] 2010, 『シズコさん』新潮社。